

前立腺肥大症に対する経直腸的温熱療法

日本大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 岡田清己教授)

佐藤 安男, 岡田 清己

TRANSRECTAL HYPERTHERMIA FOR BENIGN PROSTATIC HYPERPLASIA

Yasuo Satoh and Kiyoki Okada

From the Department of Urology, Nihon University School of Medicine

The PRIMUS system was designed as a dedicated microwave hyperthermia system for treatment of benign prostatic hyperplasia (BPH). Completed cases were 36 patients. Hyperthermia was subjectively effective in 31 patients (86%), but no appreciable changes were noted with regard to the size of the prostate. Side effects occurred in 10 of the evaluable 49 cases (20%). However, no severe side effects were recognized except in one case. The effective ratio revealed 25 of 36 cases (69%). Therefore, transrectal prostatic hyperthermia would be a useful method especially in cases of BPH with severe complications.

(Acta Urol. Jpn. 37: 1447-1448, 1991)

Key words: Benign prostatic hyperplasia, Transrectal hyperthermia

緒 言

前立腺肥大症に対する非観血的治療法が種々検討されているが、われわれも前立腺肥大症と臨床的に診断した症例に対し、経直腸的温熱療法器であるベルギー、テクノマティクス社製“プリモス”を使用し、その有用性を検討した¹⁾

対 象

症例概要 (Table 1) は登録例が60例で、適格例49例、不適格例は11例であった。

適格例の内訳は、完全例36例、不完全例13例となった。

結 果

1) 自覚評価

自覚症状の改善度を完全例36例について検討した (Table 2)。

年齢は62~87歳、平均72.6±7.2歳で、著効が21例 (58%)、有効が10例 (28%) となり、有効以上が31例 (86%) であった。一方無効が5例 (14%) 認められたが、悪化は認められなかった。

2) 他覚評価

他覚的所見 (Table 3) では、直腸診による前立腺

の変化は33例中まったく認められなかった。

残尿量は15例中11例 (73%) に改善を認め、留置7症例の内6例がカテーテルを抜去できた。

尿道内圧測定および膀胱内圧測定は変化はなかった。

尿流量測定では33%に改善を認めた。

経直腸的超音波検査による前立腺体積の計測では、縮小は認められなかった。

3) 副作用

副作用は適格例49例について観察を行った。10例 (20%) に認められ、肛門部の疼痛を5例に、内1例は既往に痔核を有しており、症状が悪化したため2回目以降は中止した。そのほか局所または全身の熱感を3例に、血尿が2例に出現したが、いずれの症状も速やかに軽快し、治療継続の妨げになることはなかった。

4) 有用度

自覚的所見、他覚的所見および副作用を考慮した有用性判定 (Table 4) を行った。有用が12例 (33%)、やや有用が13例 (36%) となり、有用率は69%であった。

5) 長期経過観察結果

長期経過症例は完全例36例の内3例は治療直後であるため33例について検討し、23例について可能であ

Table 1. 症例概要

登録例	60 症例
適格例	49 症例
完全例	36 症例
不完全例	13 症例
不適格例	11 症例

Table 2. 自覚症状スコア-改善度

合計：0～18点 (カテーテル留置症例)	
著効 (スコア減少50%以上)：21例 (58%)	} 31例 (86%)
有効 (25～50%)：10例 (28%)	
無効 (25%以下)：5例 (14%)	
悪化 (増加)：0例 (0%)	
合計	：36例 (100%)

Table 3. 他覚的所見 (N=36)

	改善率
直腸診	0% (0 / 33)
残尿量	73% (11 / 15)
UPP	0% (0 / 8)
CMG	0% (0 / 15)
UFM	33% (6 / 18)
TRUS	0% (0 / 11)

た。観察期間は1～13カ月で、平均9カ月、自覚所見を中心に16例に対し評価した。治療前と比較し、著効が11例、有効は5例で、また治療直後と比較し、症状がさらに軽快したものの5例、同程度の症例は8例、ほぼ症状を維持している症例は3例であった。一方他の治療を要したまたは希望された症例は7例で、6例は手術を、1例は内服治療を行った。なお手術症例は、治療直後に3例、3カ月後に2例、4カ月後に1例行った。

Table 4. 総合評価

自覚的所見	著効	有効	無効	悪化	計
他覚的所見					
改善	8	3	1		12
やや改善	1	0	1		2
不変	12	7	3		22
悪化					0
計	21	10	5	0	36

有用 12例 (33%) } 25例 (69%)
 やや有用 13例 (36%) }
 有用でない 11例 (31%)

結 語

経直腸的温熱療法を60例の前立腺肥大症に行った。適格例は49例で、完全例は36例であった。

- 1) 完全例36例中、自覚症状の改善は31例 (86%)であった。
- 2) 他覚的には、前立腺の縮小は認められなかったが、残尿量は73%、尿流量測定では33%の改善を認めた。
- 3) 適格例49例中、10例 (20%)に副作用を認めたが、1例を除いて治療継続の妨げにはならなかった。
- 4) 有用以上は25例で、有用率は69%であった。
- 5) 長期経過観察を自覚症状を中心に観察したが、比較的治療直後の症状を持続していた。

文 献

- 1) 岡田清己, 吉田利夫, 遠藤真琴, ほか: 前立腺肥大症に対する経直腸式温熱療法の意義. 日泌尿会誌 82: 455-461, 1991

(Received on April 9, 1991)
(Accepted on April 30, 1991)